

すっかんぽ

☆ 研究室だより No.19

1993年12月号

蛭(サケムシ) と アミメカゲロウモドキ

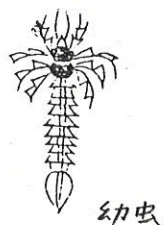
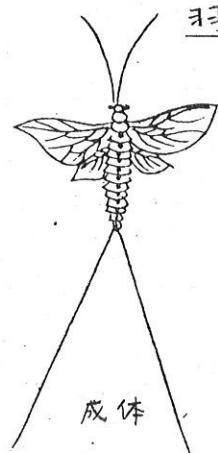
「……利根川では、秋の彼岸のころ、サケがのぼるに先だて、白蛾がおびただしく群をなして川上に向かって飛んで行く。太陽がのぼってしまうと、死んで川面に落ち、そのため水面は白い布を敷いたようになる。……（利根川図志 巻一 四）」

今から、百年以上前（1858年）、利根川 中下流域の風物や伝説をまとめた『利根川図志（全六巻）』が、赤松宗旦の手によって完成した。その第一巻には、蛭(サケムシ)と題する一節と、サケムシの成体や幼虫の図が残されていた。

「……この白蛾の形は、チョウに似ており、身の長さは、六七分（約2cm）、頭に白いヒゲが二本あり、その長さ五、六分（約1.7cm）尾には長さ一寸二三分（約4cm）の二本の毛があり、羽は左右あわせて一寸（約3cm）ほどの白色で、綿のように柔らかい。この白蛾は、朝六時ごろから出て来て、水面一尺（約30cm）ほどの上を飛ぶ。

その期間は、およそ十日ほどで、サケがのぼるようになると、その命もつまるのである。これを 蛭(サケムシ)という」

（利根川図志 巻一より）



百年以上前とは思えないほど、正確で専門的である。これらを見る限り、サケムシが 惣怒川（利根川の支流）で 大発生している アミメカゲロウモドキ（仮称）である可能性がある。もし、今も利根川でサケムシが発生している、それが、アミメカゲロウモドキと同じものであれば、**サケムシ = アミメカゲロウモドキ** が成立する。しかし、これほどよく知られていたサケムシに、まだ正式な名前がついていない（つまり、新種）とは、おどろきであった。

12月22日、サケムシが今も発生しているかどうかを調べるために下館市立図書館へでかけた。もし、利根川でも、交通渋滞を引きおこすほど大発生しているなら、地元の新聞にのっていてもおかしくない。そこで『茨城新聞』と20年前から、8月と9月に限って、「カゲロウ大発生」の記事を捜すことにした。ところが、一日

かけて捜しても、それらしい記事は一つもみつからない。どうやら、利根川は、茨城県と千葉県、の県境を流れているので、話題になりにくいらしかった。

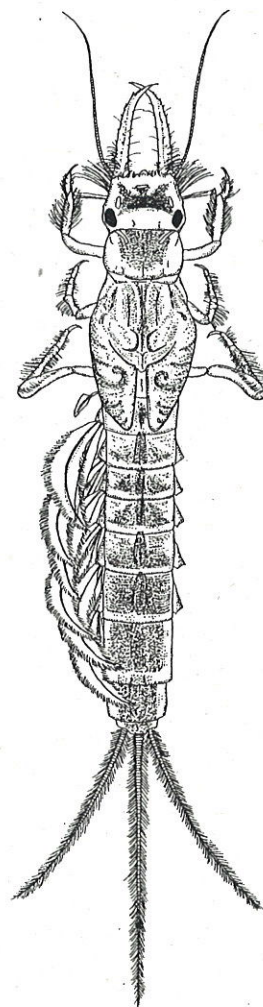
こりゃ、ためだと思て、書庫をぶらぶらしていたら、偶然一冊の本が目にとまった。『利根川読本』。

その中に次の一文を見つけた時、パッと視野が広がったような気がした。「……この壮観な

サカベッタウ（サケムシの別名）の眺めは、利根野歴史民族博物館の宮本和也氏の話によれば、現在も見られるとの事で、……シーズンには、サケベッタウの死体で真白になるという事である。」

サケムシは、今でも見ることができるとだ。

← アミメカゲロウモドキの幼虫



12月24日、クリスマスイブの朝、利根町(茨城県)の歴史民族博物館へ電話した。まようは、大そうじて、明日から休館になるという話だった。「じゃ、これからうかがいます」と受話器をおき、4時間後に到着した。

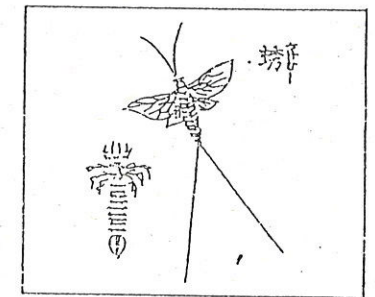
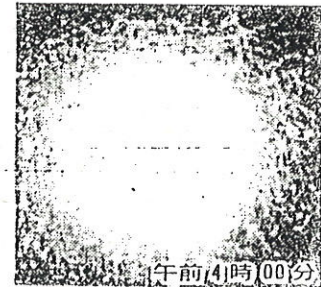
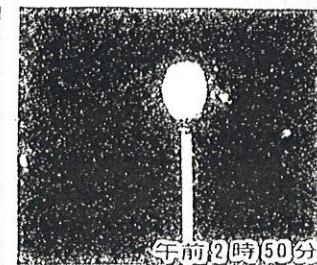
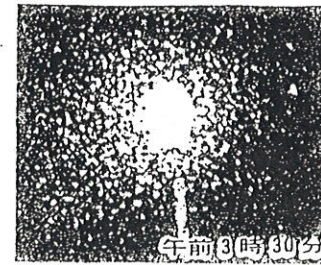
博物館には、宮本さんと芦原さんという方が待っていてくださった。芦原さんは、1983年12月20日、午前2時40分から4時45分まで、サケムシの羽化を実際に観察している。その時の写真やサケムシの標本も残されていた。話がだんだん具体的になってきた。発生する時間帯は、アミメカゲロウモドキとほぼ同じで、標本も、私が鹿嶋川でみたものと同じであった。どうやら、サケムシは、アミメカゲロウモドキとみて、まちがいないようだった。

宮本さんや芦原さんも、サケムシの正式な種名がわからず困っていたらしいが、名前がまだついていないと知り、びっくりされていた。「ぜひ、赤松宗旦にちなんだ名前にしてください。」仮の名とはいえ、アミメカゲロウモドキ(アミメカゲロウにているもの)は、『利根川図志』とこよなく愛するお二人には、あまりにも味気なく響いたらしい。種名の登録には、国際命名規約なるものが存在していて、かなりめんどろな手続きがある。つまり、ほんとうに新種であることを証明するために、世界各地の近縁種の標本などととりよせて、確かに違っているといわなければならぬらしい。この作業は、アミメカゲロウモドキの発見者の一人で、カゲロウの分類が専門の石綿さんという方が進めている。来年(1994年)の今ごろには、正式な名称がついていると思うが、赤松宗旦やサケムシにちなんだ名前がついているかどうかは、わからないが、楽しみである。

▼サケ虫のぼる▲

ことしは七月末から八月にかけて、利根川にかかる栄橋の上で、毎朝おびたらしい数の白い虫が落ちてくるのを見ることができた。

この虫が多い年はサケが大漁になると江戸時代に言われた「利根川図志」にある。そしてその姿も正確に絵にあらわされている。その絵と解説から、この虫は、カゲロウ目の昆虫であることがわかる。日本に住むカゲロウは八十種にも及ぶそうで、図鑑の写真と見くらべても、利根川のサケ虫がどの種であるのかなか判定しがたい。カゲロウは体がひとくくわれやすく完全なまま家へ持ち帰れないくらいだから、なお困難であっ



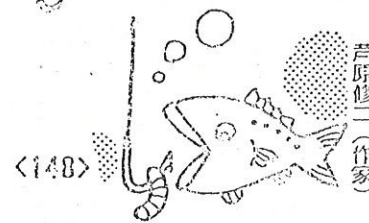
今年サケが大漁か

音なりとなる。路面白くなる。四時三十分。地平白らむ。サケ虫の勢いやや劣える。路面におびたらしい虫。自動車におおられて吹き飛ば。尻に二個ずつ黄色の卵をつけたもの多数。四時四十五分。空明るくなる。サケ虫すべて地上に落ち、なお命あるものわずかにゆるがしているのみ……(手記)『利根川図志』には「白いひげが二本あり、長さ〇・六分」とあるが、このひげ状の二本は虫のがねでよく見ると前肢のようである。また尾も三本あったようであるが、尾本に持つてきたものは、あつまし体がこわれ、尻についていたためがらは赤尻についていたためがらは赤

うである。また尾も三本あったようであるが、尾本に持つてきたものは、あつまし体がこわれ、尻についていたためがらは赤

うである。また尾も三本あったようであるが、尾本に持つてきたものは、あつまし体がこわれ、尻についていたためがらは赤

史跡めぐり



<148>

芦原修二(作家)